

市立函館病院は

深部静脈血栓症と深部静脈血栓症後症候群に 静脈ステント治療を導入

静脈ステント治療が認可されたのは
全国15施設で、道内では旭川医科
大学と市立函館病院のみ

市立函館病院心臓血管外科科長

新垣 正美



心臓血管外科の新垣正美科長



70代女性の深部静脈血栓症後症候群(PTS)

市立函館病院は、深部静脈血栓症(DVT)および深部静脈血栓症後症候群(PTS)に対する静脈ステント治療を導入した。DVTは主に下肢の深部静脈に血栓が形成される病気で、足の急な腫れ、痛み、熱感、紅潮などが現れる。PTSはDVT後に慢性的な症状や静脈障害が残る状態で、DVTを適切に治療しない場合に発症リスクが高まる。DVT患者の約10〜30%がPTSを発症すると報告されている。

同病院心臓血管外科科長、新垣正美医師は「静脈ステントは欧米では10年以上前から標準治療として行われていますが、日本では2024年12月から、重症のDVTやPTSに対して保険適用となりました。これにより、医学的に必要と判断された患者に保険診療として提供できます」と説明する。今回、静脈ステント治療が認可されたのは全国15施設で、道内では旭川医科大学と同病院のみである。

「DVTは足の腫れや疼痛、皮膚の紅潮などが主な症状ですが、血栓が腸骨静脈まで広がることもあり、比較的広範囲に及ぶことがあります。適切な治療を行わなければPTSを発症する可能性があります。重症例では難治性の潰瘍が生じ、治癒までに長期間を要します」と新垣医師は指摘する。また、慢性潰瘍や皮膚の色素沈着、下肢静脈瘤などの背景にDVTが潜んでいることもあるため、注意が必要だとし、「外来で診療するDVT患者は増加傾向にあります。難治性PTSを回避・予防するためには、早期発見と早期治療が重要です」と強調する。さらに新垣医師は「心臓血管外科では超音波技師と協力し、DVTの診断と治療に積極的に取り組んでいます。皮膚症状がある場合には、その背景にDVTなどの静脈疾患が隠れている可能性がありますので、早めに当院までご連絡ください」と呼びかけている。

再開した市立函館病院の眼科医に就任 患者の疑問や不安を可能な限り解消する

DOCTOR closeup



市立函館病院眼科医員

高岡 秀輔

市立函館病院は2025年2月から休診していた眼科を2025年9月に再開した。新しく眼科医に就任したのは高岡秀輔医師だ。

旭川生まれの高岡医師は産婦人科医の父親の影響を受けて医師を志すようになった。「中学・高校の6年間は函館ラ・サール学園の寮生活でした」。岩手医科大学医学部へ進学。「臨床実習で豚眼を用いたウェットラボ

（白内障手術実習）を行い、その経験をきっかけに眼科に興味を持ち、眼科医になることを決めた。大学卒業後の初期研修は岩手県立久慈病院で行い、研修3年目に札幌医科大学眼科学講座に入局、網膜チームに所属した。同大病院や関連病院の苫小牧市立病院、札幌東徳洲会病院で診療経験を重ね、2025年9月、市立函館病院の眼科

再開に合わせて着任した。

同病院では眼科疾患全般の診療を行っているが、手術は特に白内障が中心となる。目の中のレンズの役割をしている水晶体が濁ることで光が通りにくくなり、見えにくくなるのが白内障だ。「白内障手術（超音波乳化吸引術・眼内レンズ挿入術）は一般的には30分程度で終わる低侵襲手術です。基本は日帰り手術ですが、遠隔地に住んでいる人や高齢で単身生活をしている場合などは、1泊2日の短期入院となる場合があります。白内障が進行すると、手術時間が長くなるなど合併症のリスクも増えます」

眼科再開後の9月中旬には早速、最初の白内障手術を実施した。その後は着実に手術件数が増えている。「札幌医大では道立江差病院や松前町立松前病院に眼科医を派遣していますので、手術が必要な場合には当院で対応しています」

高岡医師は「診察の際には、患者さんの疑問や不安を可能な限り解消し、理解を深めてもらえる説明を行うことを心がけています」と話している。

日本の中途失明原因の第1位は緑内障で、患者は年々増加傾向にある。「緑内障は進行を抑制するために眼圧を下げることが重要です。治療は点眼薬による薬物療法が中心ですが、薬で効果が不十分な場合などは、レーザー治療や手術が行われます」

たかおか しゅうすけ

2019年岩手医科大学医学部卒業。

岩手県立久慈病院（初期研修）を経て、札幌医科大学眼科学講座に入局。

苫小牧市立病院、札幌東徳洲会病院などで診療経験を重ね、2025年9月、眼科再開に合わせて市立函館病院眼科に就任。

日本眼科学会

市立函館病院の「小児科外来」は1階へ移動

一部の診療科外来は、診察室や待合室が狭く、さらに採血室や内視鏡室、生理検査室(エコー・心電図)は混雑の解消が課題となっていた。

市立函館病院
副院長・感染管理室長

酒井 好幸

市立函館病院(森下清文院長)の小児科外来は、2階から1階に移り、9月16日から診療を開始した。同病院の一部の診療科外来は、診察室や待合室が狭く、さらに採血室や内視鏡室、生理検査室(エコー・心電図)などでは混雑の解消が課題となっていたことを受けての措置である。

2024年4月1日、函館市夜間急病センターは小児科医療を市立函館病院へ移管し、「夜間こども急患室」が新設された。酒井好幸副院長は「急患室のスペースは日中使用していないため、小児科外来を移すことで空いたスペースを有効活用するこ

とにした」と説明する。小児科外来の移動先である急患室は夜間に使用しているため、移転作業(引越)は9月13日から15日の3連休の昼間に実施された。

新しい小児科外来には診察室3部屋が設けられたが、従来よりもスペースが狭くなり、患者のプライバシー確保が難しいという課題が生じている。待合室と処置室も同様に手狭となっており、インフルエンザ流行期など、患者数が増加する時期には、十分なスペースを確保できない可能性がある。一方で小児科外来の反対側には十分なスペースを確保した特殊外来が設

けられた。「特殊外来には、神経外来や血液外来、心臓外来、内分泌外来、膠原病外来、腎臓病外来、アレルギー外来などの専門外来を設置しました」

2025年9月30日現在、運用開始から2週間が経過したが、大きな問題もなく診療が行われている。

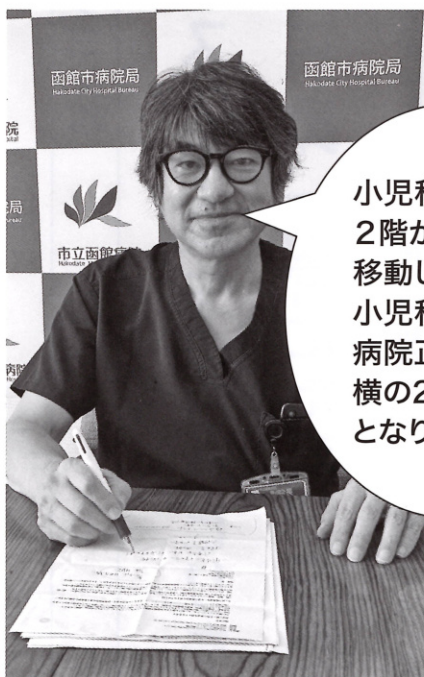
現在の小児医療は細分化が進み、各分野の専門医が診療にあたっている。「小児は成人とは異なり、特殊な疾患の症例数が少なく、しかも幅広い分野にわたって疾患が存在するため、すべての疾患を早期から専門医が対応することはとても難しいの

です」。大学病院や大都市では成人と同じように分野ごとに診療を行っているが、地方病院では常時高度な診療を実現するのは困難で、専門外来は札幌医科大学やNIT東日本札幌病院、札幌北辰病院から小児科医の派遣を受けているのが現状である。

酒井副院長は「地方病院では一般小児科医も時代に遅れないよう研鑽を重ね、多くのガイドラインやエビデンスを遵守した標準的な治療を行うことが重要です」と話している。



小児科受付



小児科外来は
2階から1階へ
移動しました。
小児科受付は
病院正面玄関
横の23番受付
となります。

酒井好幸副院長



小児科外来



小児科待合室